

會



報

1958年5月

197

日本山岳會

ダーズリン近況

田口二郎

一月末鉄鉱石油調査団の人達と二晩泊りてダーズリンに行つて来た。君やチャカや喜一君と行つたのは、五三年春だから、足かけ五年ぶりだ。商売の人はダーズリンといえたいてイルマウント・エヴレストのホテルをとるので、行つたところが、ガランとして人気がなく風呂も生ぬるくて具合が悪い。例の名物のロバに葉つてラマ寺院のある展望台へ行く途中、君達と泊つたホテル・ウインダミアの高窓から僕の顔を覚えていたネパールの召使が体を乗り出すように手を振るので、小さく、つつましく、アトホームのこちらのホテルに來なかつたことが悔まれた。こちらの人が山荘らしいからね。しかし今度はこの前よりいいことをしたよ。

カルカッタの飛行機の中から同行の人達が口をそろえてタイガーヒルの話をするので、ついに早朝四時半、ジープでまだ雪のあるこの有名な展望台に出かけることにした。君と来た時も、またその前の年に今西さんらと踏査隊で来た時も、タイガーヒルに行かなかつたのは、不思議な感じがするが、あの時は準備で山見物どころではなかつたし、ということかな。本当のところはどの面々も不精の点では誰れにもヒケを取らぬというのが、タイガーヒルを訪れなかつた原因だと思ふが如何。それに妙なことに、この前は心からカンチ

の風景に感激したという仲間の顔を思い出すことが出来ない。「やっぱ写真の通りだな」なんて話合つたことしか覚えていない。しかし、今度行つて、やはりタイガーヒルは行くべきところだということをつくづく痛感したよ。

朝の眺めがあまりに素晴らしかつたので一行の中の御老人の提唱で夕方再びジープで出かけた。夕刻のタイガーヒルは寒々として訪れる人もなかつたが、丘をめぐる下界はヒタヒタと押し寄せる厚い雲海に埋れて東方のブータン國境の遙かな山脈が、うす紅に映えて、如何にも未知の世界のように浮んでいるのは楽しかつた。カンチェンジュンガも朝より夕方のほうがずつと良い。朝の光は速射的で山はたちまち平板的になつてしまふが、夕刻のカンチは、アーベントロートから、やがて暗闇に姿を消してしまふまで、長い時間をかけて細かいヒダの変化をあかす見せてくれた。僕がこゝに眼を吸い寄せられたのは、南西面の頂上直下の氷のクローアルだ。君達と来た時は、このクローアルは、僕達には何の意味も持たなかつたが、望遠鏡でのぞくと、その高い領域は、如何にも空気が薄く、寒々としていて、一昨年ここに最後の第六キャンプを設けて、ついにこの歴史的な頂を攻略した英國隊の人達が今もつて酸素ボンベを背に苦斗している姿が黒点となつて動いているような錯覚にとらわれる。

△ シェルバの話を書かせよう。午後になりやかな市場に下りて行く

人足風体の男が寄つてきて挨拶する。何れは顔見知りのシェルバに出くわすとは思つたが、道路仕事の帰りといった風体なので気がつかなかつた。君も覚えていてと思うが、大兵だが余り強くはなかつたアンツェリンだ。僕は今回は山仲間と来ているわけではないのでそう一人で飛び廻ることは出来ない。ホテルを告げて引返したらやがて厚地の真赤なジャケツに、スイス製の粗地の登山ズボンに身を固めラバソールのキャンプ靴をはいた三人のシェルバが訪ねてきた。スイスのグリンデルヴァルトやツェルマットで登山シーズン中村の一本道で所在たに煙草をくゆらしている案内たちと寸分違わぬ恰好なのだ。彼等を見て、ようやく僕も山らしい気分になつた。山は見えるが、この連中がおらぬと、山も「登る山」にならぬからな。三人とは、マナスル頂上に立ち、日本にも来たギヤルツェン・ノルブと、それに君も知つているグンデイとニマ・テンシんだ。あの二人は五六年の登頂遠征でも大働きをしている。しかし僕にとつては五三年隊で苦業を共にした仲間でもある。二人は柔和そうな目をしばだたせて如何にも懐しげに当方を見ている。一度シェルバと苦業を共にした外国の登山家が「シェルバは実にいい奴だ」ときまつて書くのも決してお世辞ではなく、こういう人間の共感を生む素地を彼等が多分に持つているからに違いない。

△ 当時のシェルバのことを聞いたのだが、なかなか名前が思うように出てこないのには弱つた。グ

ンデイやニマの助けで、やがてイモズル式に出てきた彼等の一人一人の動静を聞くと、やはり五年という才月の長さを考えさせられた。それがたんに平板的な五十年という時の長さではなくて、シェルバ社会に激動を与えたエポックであつたという意味で、久しぶりでダーズリン滞りは僕を驚かせ、不安にさせ、悲しませた。しかしそれでも長い眼から見て希望を捨てさせるものではなかつたと見える。

△ そんな気を持たせる書き方をせずに卒直に書こう。まず愉快な話から。

クツクのパンシーはもとより年はつたが、遠征隊のクツクの足は洗つて、さる印度人の家族にくつついてアツサム州に移住した。チビの愛称で可愛がられたニムテンバは、大男になつて今はカシミア地方のラダックで巡査をしている。仲間のシェルバの代筆を出していたラマ僧のフラツパーは谷に下りて百姓だ。サルキのことはとうとう尋ねじまいだつた。そこでマナスル登頂のギヤルツェンに「君達は相変らず山稼業か」ときくと、たくましい顔を寸時くもらせてこういふ話をした。

「大きな遠征は昨年来ばつたりなくなつてしまつた。今年予定されていたフランスのジャヌー遠征も来年のばしになつたし、ノールウエイのアンナブルナ計画も隊員一、二名、シェルバ二名という未曾有の小規模のもの。そこで自分等は、アメリカ人の雪男狩りに行くことにした。遠征がなくなつた

ことばかりが原因ではないが、ダーリジンのシエルパの生計は苦しくなる一方で、昨年百幾組もいた家族が、今年は五十六組になつてしまつた。サーブ(僕のこと)はデリーにいと聞くが、召使や料理人が必要なら是非シエルパ社会からやとつてほしい。」

△

ヒアラヤン・クラブのヘンダーソン邸の庭に、シエルパが五十人近く集つたことを覚えてるだらう。一九三〇年代からのヒマラヤ登山の歴史的業績と、その名とがつちり結びついているアン・タキーヤ、テンシン、アジバ、ラマ・パサンなどの剛の者を混えて、考えてみるに日本がマナスルを始めた前後からの数年がシエルパ社会にとつては、わが生涯の最良の年であつたはずだ。が八千米の巨人群がかくも短期間に次々となぎ倒されようとは、シエルパならずとも誰が予想したことだらう。

懐しいダージンを訪ねて僕が会いたかつたのはやはりヘンダーソン夫妻と五二年、五三年の苦業を共にしたギャルツェン・ミツチエンだ。英国に帰つたヘンダーソン夫妻に会えぬことは致し方ないにしても、五三年組のサーダーとして必ずしも手腕を發揮しなかつたギャルツェンが、何をしていたかは僕には一つの気がかりだつた。しかし彼についての明るにニュースは大いに僕を楽しませた。というのは、登山学校の教師に転業して、他の教師等(七名のシエルパがいる)とカシミヤにスキーの練習に行つてゐるという。

ンディ・ニマに案内されてラコグニート丘外れの登山学校に行くといふこの間ネル首相によつて開校されたという美術館のようなしややたる近代建築があつて、ヒマラヤ杉越しにカンチが光つてみえる。夕刻で内部に入ることは出来なかつたが、西ベンガル州の国費で建ち、この七名の教師は月給を保証されて半官吏であるといふ。校長のテンジンは千二百ルピー、ギャルツェン・ミツチエンその他は百五十ルピーから二百ルピーをもらつてゐるとか。ダージンは四つの附属館を持つていて、その中二つは教師になつたシエルパ族の住居だ。これから移り住むといふが、ギャルツェンらは飛驒の山家から東京のアパートに引つ越したように居心地が悪いに違いない。この学校は何をするかといふと年に二回の遠征を行つて印度人に登山熱を鼓舞し、また技術を教える。学生には地質調査所や、測量所の役人あり、また大学生も多い。しかし参加費が、丸腰で来て安全装備を与えられて四百ルピーというから、見方によつては安い、印度の生活水準からいふなら相当なものだ。

さて、さきに僕はギャルツェンが教師に転身したと書いたが、それは一度教師になると、外国遠征隊のサーダーやシエルパになることは禁じられてゐるからだ。サーダーとしての天分もさして恵まれず、また年令的にも先の見えていたギャルツェンにこの途をえらんだのはまことに利口だつたとは思われないか。

これが一つの途であるなら、シエルパ現役第一流のラマ・パサンや、ギャルツェン・ノルブのえらんでいる途、つまりあくまでサーダーとしての正攻法で外国遠征隊を待ちうけている姿勢は頼もしくもあり、また十二分の自信と見通しがあればこそ、数少い伝統の担い手として立つてゆけるのだと思ふ。名をなした少数一勿論テンジンは別格だが一はうまく活路を求めたと云えばアンターキーは今でもサーダーであるが、年を喰つたのでシッキムで道路請負業を抜け目なくやつてゐると聞いた。が名もない多数、まだ世に出ない若いシエルパが登山稼業で名をなし、そうでなくてもそれで着実に生計を立て得る日がくるだらうか。ちよつとアルプスが黄金時代を終え極めてスモールにヴァリエーションの時代に入り、さらに進んでスポーツ登山の広汎な大衆を吸収し、三代もつづいたアルプス・ガイドの社会を生み出したようにこれからのヒマラヤが、シエルパに生活の潤沢ではなくとも、少くともその安定をもたらさざらうか。

△

いつかそうなるとは確信しつつも、近い将来にそれが来るようには思えない。立派なテンジンの家が立ち、本人は今年もイタリア山岳会に招かれてドロミテでスキーの旅をしてゐると聞いた。ダージンは、僕が帰る時には深い朝霧にとざされてゐた。(カルカッタよりデリーへの夜行列車で、一九五八年二月九日・加藤泰安氏あつて)

ニユー・デリーの印象

別宮 貞俊

出発に際しましてはいろいろ有難うございまして。ダージリンではタイガー・ヒルへ行つたけれども何も見えず悲観しましたが、カリンボンで翌朝見えてすつかり悦しくなりました。ことにカリンボンでは昔多田等親師がラサでいた家のラマ(七十二才)に会い、その息子 Dun Dun Namgyal が英語で通訳をしてくれて大いに愉快になりました。午後ダージリンを發つて、夕方ついたので翌日 Tharchin Babu 師の都合を尋ねたら教会に出て会えず、本をあとから送るということを伝言して貰うことにしました。

ギャルツェン・ノルブの家を二回訪ねたがギャルツェン夫人二回とも不在、深田隊のシエルパ Pasan Putal, Dawa Thondup, Rakpa Tunzin に会いました。カトマンズでは Chinay Lal Guacharya には会えませんでした。クリシュナ・バハドル君に頼んでおきました。Gajo Nanda Vaidya 君はナムチェ・バザールに行つてい

帰つたところでナムチェ・バザールにはよいシエルパがいてくれのないかといいました。その経験を記したりリストを送つて貰うことにしました。フォーリン・セクレタリー、サパ氏にはクリシュナ君が案内してくれ書物を贈呈しました。ヒマルチュリ隊のことはフォーリマルなこととはかわらない、とにかく日本に許すかといふようなことで、何だか話がつまづきますが、何も困難はないといふのです。毎日の後援がどうなのか、ちよつと当方の主張をするのにそれが不明で強さが足りなかつたが、どうもよいらしい。

クリシュナ君もえらくなつてゐるのです。Department of Cottage Village and Small Scale Industry というところのダイレクターで地方民を一年づつ呼び寄せて合宿に泊めて技術指導をしてゐるのです。大阪から遠山一郎という人が農耕機のデザイナーで二年の契約で指導を行つてゐるのもクリシュナ君の部にあるのです。外にドイツ人が四人ゐる。遠山氏はコロネーション・ホテルに独乙人と一緒に泊つてゐる。ネパリーズのコックを雇つていて、そのコックはマナスル隊に行つた由。先発隊の人が来たから自分の使つてゐるのはいくらだから一室は提供出来るといつてくれたのでたのんでおきました。

ポカラには行きましたが九時三十分に着したのだけれど春だからあまりよく見えない。ただ行く時に飛行機からよく見えました。やはり冬でなければ駄目です。と

にかくカトマンズは氣に入りました。それで今日午後ニューデリーに来ました。田口夫人と子供たちとに会いました。田口君は出張して夜帰るからそうしたら話はずむでしょう。あすから当分スイ

スへはいるまではセンターの仕事をしませう。皆さんよろしく。
二伸、クリシュナ君がジュネラル・カイザーの所へ案内してくれました。玄関で失礼するくらいに考えていたら是非上れというので

上ると小生の右腕をかかえて長い廊下をずつと並んで歩き、明治天皇の肖像の前へ案内してくれ、それから何を飲むというので、ジョニー・ウォーカーを抜いてくれて、ハイ・ボールをすすめられる

という歓待で恐縮しました。本は贈呈しました(松田雄一氏あて) 四月三日、ニューデリーにて

新旧役員懇談会
新旧役員懇談会は、五月二十三日午後六時半から本会図書室で開かれた。二十二日帰国された別宮会長をかこみ、ウイスキーの杯を重ねながら大いに話がはずんだ。特に別宮会長のネパール、スイス、ロンドン、ニューヨークの世界一周談や、特有のユーモアをまじえた世界の山々の回想談はまことに興味深く、途中から録音テープにおさめられた。

過日ラジオで貴殿のウェストン氏追悼のお話を承り、深く感謝すると同時に過去のことをいろいろ思い出しました。

「知りましねえ」と答えるのみで当惑した。後になつて考えてみるに、上高地と聞けば早わかりしたかも知れぬのに、ただ槍、槍とのみ聞いたのでわからなかつたのである。

翌朝そこを出て梓川を登つて行くに川の渡渉(沢渡り)には大いに困難した。ようやく槍沢について、その猟師小屋に一人の猟師がいて登る道をきき、午後三時ごろではあつたが、早速槍に登り現在の肩の小屋のあたりまで

僕も本年八十四才の老生なのでお目にかかつてウェストン氏のことなどお話ししたいと思うが、何処にお伺いしたらよいでしょうか、またあつてまいしお願いだが、拙宅にお出でいただけたいと思います。山を愛する貴殿、ウェストン氏を知っている貴殿とお話したくなつてこのおたよりを書いた次第である。(昭和三十二年七月五日)

(九頁より)
氷河は特有名のもので、これは田中董先生におたずね下さい。とにかく雪線は一四〇〇米前後、森林限界千米にもかわらぬ大氷河は二百米まで下つています。従つて氷の部分非常に長く、それにザイテン・モレーンがなく、ルートは氷河上に取らねばならず、CⅢ上の一四〇〇米のセラックでワツセル・アイスの氷塔でもろく、アイスハーケンもきかず、キャンパス以上で本格的な氷の大クレバスに出会つてホツとするような有様です。この氷河は急速にとけていて、それ故すべて氷河の末端には湖が大きく広がり、二カ月後の氷塔は様々にとけてしまつていて驚ろいたしまつています。氷河は流れるよりとけてしまつています。いいかえると急速に暖くなつていくわけですから。南極もそうではないだらうかと董先生までいわれました。皆さまよろしく。

私事(岡野金次郎) 小島鳥水氏と共に明治三十三年岐阜より三日がかりで飛騨高山に出、それより乗鞍岳に登山し頂上についた際濃霧にわかにか晴れて北方に偉大な山容を発見し、案内者に問ひし所槍ヶ岳なる旨きき、将来ここに登山せんことを期しました。実に乗鞍岳はウェストン氏に穂高を紹介せし奇縁の山なのです。

ここより十二里奥に白骨温泉と槍に登る道があるが、そこまで行けば槍に登る道がわかるかも知れないといふのでそこまで行くことにした。ここで猟師三人を備へ、いよいよ登りかかつたが分水嶺の沢を登る道もなく、困難を極めた。しかしその頂上に出た時の眺

望の偉大さ美しさに打たれて、二人とも声も出ないほどであつた。それより上高地に下り、猟師小屋についた(後に嘉門次小屋と分つた)所二人の猟師がいたが、その一人は谷川に流されて全身打撲傷を負ひ物凄いうなり声を立てていたので胆を冷した。われわれも川を渡渉することは最も危険で困難なことであつた。僕も一度流されて危く命を落とすところであつた。

その後僕もウェストン氏とは懇意になり小島鳥水を紹介して、ウェストン氏から青年が山に登るよ

槍ヶ岳のころ(遺稿)

岡野金次郎

と、種々計画せし目鼻つかずようやく信越線が松本駅まで開通せし明治三十五年夏取敢えず横浜を出発した。松本駅の一駅手前で豪雨のため土砂崩れとなり不通のため徒歩困難に松本駅に到着、それより一里ばかり奥のいりやま

一昨年乗鞍岳の頂上までバスが開通したとこのことにて、愚妻と二人で出掛けたが、昔時七合目あたりの低松地帯で低松の上をはい廻つた困難と思ひ合わせてうたた感慨無量であつた。

本稿は昨年七月藤木九三氏がNHKより「日本を紹介した外人」と題する講演に對して岡野氏より藤木氏にあてた書簡である。標題は編者が適当に附したものである。なお岡野氏は山岳会創立と同時に入会されたが、数年後退会されている。同氏に関しては山岳四十四ノ一「小島と私」(岡野金次郎)会報一七二号「老友岡野さんの思い出」(高野鷹蔵)、「岡野翁の思い出」(伊藤秀五郎)を参照された。

早うここを出発した。われわれは到着所で槍ヶ岳に行くにはどこからどう行けばよいのかと尋ねたが、誰れも「知りま

その小屋で猟師同志互いに地図を書いて話し合い、槍ヶ岳に登る道順を聞くことが出来大いに助

一九五八年三月二十四日(槇氏あて)

志村烏嶺翁(上)

伊藤 隼

志村烏嶺翁は、時々私の宅を訪ねて下さる。私より歳上ではあるが、八十三の老齢とは思えぬ元氣一杯の若さで、昔の山を語り合う時の瞳は、殊に輝いて見ゆる。まだ眼鏡の必要もなく、大した身体の冷えも感ぜず、聴覚もたしかだし、筋肉の隆々たる腕や足などをさらけ出して、叩いて見せる時などは、壯者を凌ぐ概がある。ただ歯は全部脱落してはいるが歯齧の力は沢庵漬などをも、容易に噛み切るだけの力を持つている。正座の時から習慣だといつて、子供の姿勢を崩したことはなかつたが、一昨年胆嚢炎に罹つて以来、膝の関節が思うようにならないといつて足を投げ出し、杖を曳くようになった。食物に対しては小言をい

つたことがなく、冷水摩擦は師範学校入学当時から、台湾引揚げまで怠らざり実行し、摂食量には細心の注意を払つてゐるせいにか、十五貫の体重を持つて、鏗鏘たるものがあり、底力を失つてはいない。

氏は明治廿五年宇都宮師範に入學したのであるが、その年の六月チブスに罹り、病後の静養を奥日光の温泉に求めて後、単身日光白根に攀じて、体力の恢復を試された。同二十六年の夏には那須岳に登り、同三十二年の夏には富士登山を試みたが、雨に遮られて果さず、五合目から引揚して箱根を訪

ねたと云う。

師範学校卒業後、小学校に奉職していた時代、生物学や地質学の文検に合格して、宇都宮中学校の教諭の資格で奉職し、次で茨城師範に転じて、野州一帯の植物を採集し、仙台第一中学校に転じて、海岸の植物を採集すること一カ年半の後、長野中学に転任、それから高山植物に親しむようになつた。それは明治三十六年十一月のことであつた。

明治三十七年、春の雪が溶け始めてから、戸隠山や飯綱山等に攀じ、七月には浅間山を訪ね、浅間山から望んだ八ヶ岳の偉容に打たれて、八ヶ岳山集を駆け廻つてゐる間に、高山植物との因縁を益々深め、それから白馬岳に移つて花を訪ねること引続いて四回、(後には十三回となつてゐる)、北アルプスの横断を試みることに三回を数ゆる間に、益々高山の靈氣に打たれ、信州に奉職したことの幸福を、しみじみと喜ぶのであつた(内一回は高頭氏と同行して横断したこともあつた)。

その間、白馬岳でシロウマオウギや、ヒメウメバチソウの新種を発見したことや、八ヶ岳がトカチスター分布の南限地であることを見出したことも学界への功績であつた。またこの頃には、山の地図がなく、登山案内書がなく、富士や木曾御岳などの外には、今日のような案内者のなかつた時代のこととて、登山の苦心は一通りではなかつたのにも拘らず、旧式の大きな写真機を携え、腊葉を作りつつ、山を訪ねて廻つた苦心の程は、想像に難くはない。

氏の高山植物研究の目標は、緯度や高度の変化によつて、高山植物は如何なる分布状態をしてゐるかを探究するにあつた。それがたかには奥羽地方の山岳にまで、調査の手を伸ばしたのである。かくして採集した植物の標本は、四千点にも及んだ。それで生徒からは「山の志村」、「山荒し」などのニックネームさえ受けたという。

氏が撮影した山の写真は、雑誌「山岳」の創刊号からこれを飾つたが、前田曙山氏主宰の雑誌「園芸界」にも発表してゐた。それをウエズトン氏が見て、その入手方を小島烏水氏に依頼し、小島氏は更に高頭仁兵衛氏を介して、志村氏に依頼して来たので、その中の数枚をウエズトン氏に贈つた。その内の杓子岳の雪溪を撮影した写真は、ロンドン人のアルバイン・クラブの、「アルバイン・ジャーナル」へ掲載された。即ち白馬岳が初めて世界に紹介されたことがやがて志村氏とウエズトン氏とを結ぶ契機となり、志村氏が「千山万岳」を著すに當つて、志村氏は小島氏を介して、ウエズトン氏にその序文を求められてゐる。よつてウエズトン氏もペンを執つて、「この魅力的でかつ重要な書籍の保証人となるために、招ぜられたことは喜びでもあり、特典でもあります。おそらくどのような登山家として、この両者ともに日本アルプスの権威として、語ることに出来るのは、志村氏においてはあるまいと思はれるのであります。なぜならば、志村氏ほど完全にあの雪の宝庫に入り、かつ彼の山々の

ロマンチックな、要塞の神殿にまで滲透したものは、ないからであります。」云々(以下略)

と序文の冒頭にかいてゐる。日本に多くの登山家があるが、また多くの山岳書を出してゐるが、ウエズトン氏の帰国後において出版されたものが大部分を占めてゐるためこうした関係は結び得なかつた。

氏はまた明治三十七年の頃から、高山植物の栽培を研究してゐたので、独・仏・瑞西などの学者達から、高山植物交換の申込みがあり、従つて幾通となく文書の交換も行つてゐる。中でもナポレオン三世の息、ローランド、ボナパード氏からも、幾通かの手紙を受けてゐる。それは当時の植物学者名鑑に、日本の高山植物家として、志村氏の名前が載つてゐたからでもある。

しかるに志村氏は、惜しいことには斯界の第一人者を以て目せられるまでに至らずに、大正五年の頃、日本内地を後にして台湾に渡り、台中の中学校に奉職された。その際信濃毎日新聞は口を極めて、信州の山岳界における氏の功績をたたえて、渡台されたことを惜んでゐる。

物採集などは容易なことではなく、殊にその時は雨に妨げられ、氏の野心も空しく、一草も得ることなくして下山されてゐる(つづく)

古原和美

カルカッタにて

(前略) ネパールへの入国査証は簡単にとれ、気象台も天気予報を放送してくれることになりました。各国の遠征隊はすでに全部カトマンズを出発してゐます。珍しいのは印度隊がいまチョー・オユイを目指してキャラバン中です。今時カルカッタにまだうろうろしてゐるのはわれわれの隊ぐらゐのもですが、カルカッタの宿舎がただで出血がないのと、登頂を別に望んでいない気安さから四人共割合ひのんびりしてゐます。カトマンズでは大体マナスル隊が泊つたとかいふ総理大臣の秘書官の家とかがきめられてゐる情報です。ネパール・ルビーとインド・ルビーとのオフイシャル・レートはいま一三〇—一〇〇ですが一般には一五〇—一〇〇で通用してゐます。(中略)われわれの行動は約五日遅れてゐますが、止むを得ないと考へてゐます。カルカッタの猛暑はすでに経験のことですが全く閉口してゐます。三日午後三時ハウラー駅発、ラクソール行の急行(一等をはりこみました)でカルカッタを出発します。(四月二日カルカッタにて、松田雄一氏宛)

「マナスル」発行さる 第三次登山の正式報告書が発行された。会員割引千四十円(送料別)

登頂のすぐ後に②

沼井 鐵太郎

K2初登頂

世界第二の高峰K2（八六一一米）は踏査試登初期の頃からアブルツイ侯等によって先鞭をつけたイタリアのデジオ教授遠征隊の完登するところとなった。それは一九五四年七月三十一日午後六時のことである。

登頂者コンパニョーニとラチェデツリの手記を、デーヴィッド・ムーア英訳の「アッセント・オブ・K2」（一九五五年、エレク・ブックス社）と近藤等邦訳の「K2登頂」（エデルワイス叢書第九巻、昭和三十一年七月、朋文堂）によって調べて見よう。

K2登頂者の二人は、頂上に達しない前に酸素を使い切ってしまったにも拘らず、強い耳鳴り以外に異常なく、正常な精神と勇氣とによって、終に全く平らになつてしまつた所まで登つてしまつた。

「われわれはその平たいという感覚上の証拠を殆ど信ずることが出来ないで、周囲を見廻した。何箇月もがきにもがいた後われわれの旅の目的の外に何物もない。今や頭上には青空は実際頂上にいるけれどわれわれは実際頂上にいるのだらうか。前面かなり遠く離れてもう一つの山稜が見える。絶頂の北に第二ピークがあることは、ベイス・キャンプから観察して知つていたが、われわれはそれが全く確かであつてほしいと思つた。」そして眼を下げて地平線をのぞき、今いるピークの方が高いこと

をさつた。

「それはごく単純な景色だつたが、検分している間にわれわれは名状すべからざる激情に駆られた。われわれは互に抱き合い、それから雪の上によつて倒れたので、酸素マスクを外すことが出来た。次にイタリアとパキスタンの二つの小国旗をピツケルに結びつけ、コンパニョーニが故郷のヴァルフルヴァから持つて来たイタリア山岳会の小旗もそれにいつしよにした。」

登頂記念行事はもう一つある。それは二つのピッケルと旗（複数）とで一種のトロフィーを作り、それから自動カメラを使つて二人が握手している写真を撮つたことである。また、頂上到達の真実を後日まで証拠として残すために、高中既に空となつてそのまま背負い上げて来た酸素装置も其処に横たえたようである。

K2の初登頂は苦難を乗り越えそして下山も苦難を覚悟せざるを得ない日没間近かの時刻に緊迫した状況で果されたが、その登頂実感は滞頂半時間の間に、しかも物凄く烈風の下に、略々完成されたように考えられる。速成トロフィーを持つて記念撮影をしてから、「少しづつではあるが、われわれが本当に何かえらひたことを成し遂げたのだという」ことを自覚し始めた。そして遠征の当初からの推移、僚友プッシュの死などの素速い回想と第八キャンプへの下降の憂慮が起つたことが記されている。

第八キャンプからの救援隊アラム、ボナツテイ、ガッロツテイ

と二人のフンザ夫人を迎えられて「うん、うん」とか、「いや、いや」とか、初めは彼等の問いに対して単綴音だけでしか答えられなかつたものだが、それは乾燥空気のための咽喉潰瘍や或いは下降途中で拾つてつけた酸素マスクのせいで拾つてもつと深刻な何か、言葉でいい表わせたい何か、われわれを泣かせたいような何かがあつたためであつた。と述懐しているが、それは考えようによつて登頂感激の最後の駆足が作用したのかも知れない。通常の場合、登頂者が一登山者の構成員であり人間社会の必須組成である限り、声という声なき感激応答行動は登頂者の実感反応が内在的より外発的の第二次段階に改めて発展したもの

と見なしてもいいであらう。最後に考えたいことは、K2山頂部の特異性である。山は、山頂部だけに関して分類すれば、(1)点状頂または尖頂、(2)円頭頂またはドーム頂、(3)水平線状頂または平頂稜、(4)面状頂または平坦頂となる。厳密にいえば、それは幾何学的の点、線、面（平面及び曲面）の程度の差であるが、マナスルは(1)に、エヴェレストは(2)に属してもいいようであつた。これ等はいいが、われわれがみて最高点の感覚が簡單明瞭であつた。換言すれば点と点の亜種であつた。しかるにK2では最高点の認識が瞬間感覚だけで決定出来ず、知識的観察推理の補助を必要とした。即ち山頂部の特異性、一寸見では北方高点といずれが高いか分からない位の平頂稜、それも百人位乗れる頂稜の存在によつて、登頂認識そし

登頂登高考

（丁）

本誌一九六号から拙稿「登頂のすぐ後に」が載るようになったがこの企劃は登頂に関する感激慣習行事の比較記録が目的であつて、五年位もかかろうと思ふ登頂考現学的のデータ分析である。或いは何か系統的の研究に発展してゆくかも知れないので、大方の御支援が望ましいものである。さて本稿既刊分には九カ所も校正洩れがあるが、二三重要な正誤はここにあげておきたい。四頁二段一行登山は登と一字だけに、同八行とうこうはとうこうと五字にする。五頁三段二行一九三三年は一九五五年の誤り。

登頂をとおようとつまつて発音するのは若い人ばかりでないことを最近発見して驚いた。それは、A・C・百年祭についての松方三郎氏の講演であつた。筆者は同氏が戦後派の発音をするのをはつきり聞いた。個人の習癖による発音マナーというだけでは充分説明できない気がする。なぜといつてそれまで筆者のアンケートした範囲内では本会の中老格前後の人皆戦

前派発音であつたからである。また、登高の発音は、たとえば「登高行」などは、横氏は即座にとうこうとうと発音したが、三田氏はとうこうとうとつまつて発音した。では三田登高会を何というと呼ぶと、さあ、三田とうこう会といつてようだとの答。慶大OBでもつと後の時代の人々になると、もう、とうこうの五字発音が絶対的である。それでも会名はとうこう会であるらしい。結局日本語の語呂の関係だなどという所に安直に落ちたまゝになつてゐる現状である。

かみぐちがかみこうちとなり高地と字を記すに至つて、故小島、辻村氏等になげかれたのも伝説的話題となりつゝある今日、そして人間が作つた人間の言葉が時代と共に変転しつゝある歴史的事実において、詮ないことではあるが、少くとも山岳に関する言葉とその発音の変遷を一つの研究課題として考える人は果して幾人あるであらうか。（一九五八、三、三）

沼井

チヨール・オユー登頂

オール・インディアのチヨール・オユー登山隊は五月十五日登頂に成功したとネパール外務省が五月十八日発表した。

一行は隊長ケキ・ブンシャリ氏（ボンベイ出身の法律家）以下七名で、四月二十八日一万八千呎のB・CでN・D・ジャヤール少佐が肺炎のため死亡するという事故があつたが、これに屈せず登高を続行、二名の隊員が見事頂上にネパールと印度の旗を立てた。

The Everest-Hotse Ad.

Venture. by Albert Egger.

George Allen & Unwin Ltd,

London. 1957. p. 222. photo

24. 21 s.

この本は一九五六年五月日本隊のマナスル登頂より、やゝおくれで世界第四位の高峯ロツツェの初登頂とエヴェレストの第二登第三登に成功したスイス隊の報告である。独文の原本は一九五六年にベルンで刊行、英訳本も一九五七年八月九日付のタイムズ文芸附録に紹介されているところからみれば七月には既に出版されたものと思われる。そして秋十一月には、はるばる日本へも船載された。なかなか手廻りのよいことである。スイス隊の成果は当時のJAC会報では、何の故か黙殺されて、一行の記事も見当らない。尤も黙殺はスイス隊だけに限らず、カンチェンジュンガ、マカル、ガツシャールムII等の初登頂も会報上では、同じ目につてているし、JACで歓迎会をひらいたギヤストン・レビュファ氏の来朝なども切捨てられている。外国人のことなど関つていられないという方針などおもしろい、一九五七年五月九日マナスル登頂一周年記念の盛大で楽しかつた集りなども、会報には一言半句の記事もない。ふるい会報には海外登山界の動静も、横文字本の紹介も、JAC自体の動きも収録されて、記録資料として参考になる点が少くないとおもしろいのだが、どんなものであろう。

のは随分多い。そしてそれらは店頭からじきに姿を消してゆくが、「山岳」にも「会報」にも紹介されることは甚だ稀なところをみると、近年JACでは山の洋書を買求め、貪りよみ、紹介するというような気風は余り飲ばれないのでもあろうか？

ともかく登頂のニューズさへ黙殺されたスイス隊の報告書が、紹介される見込みはまずあるまい。しかし興味深くこの本を読過した私は、少しばかり内容にふれたいとおもう。

この遠征隊はスイス山岳研究財団の主催で、エヴェレスト登頂の翌年一九五四年にはネパール政府にエヴェレストとロツツェへの登山許可を申請し、一九五五年の始めにはエグラが隊長に任命され隊員の選考に取掛かり、医師を除いた顔触れは順調に進んで、その夏から冬にかけて、アルプスで実地訓練を行つていく。

エグラ 弁護士 四三才
デイル 法律家 四八
グリム 歯科医 四四
フォン・グンテン 化学者 二八
ロイトルド 医師 二八
ルフシシガ 軍事教官 三五
マルメ 技術家 二九
ミュラー 氷河学者 三〇
ライス 航空工業に従事 三六
ライスト 航空工業 三五
シュミット 実業 三二

十一人の隊員中ライスとマルメの二人がガイドの資格をもち、あとの連中はアマチュアである。アルプスでは、いづれも相当の猛者であり、グリーンランド、バフィン、アイランド、カナダ北部等への遠

征経験ある隊員も二三あるが、ヒマラヤの地を知るのには、一九五二年秋のエヴェレスト試登に加わりサウス・コル以上に達したライスタと一人なのは、やゝ奇異の感じであるが、一九五二年春秋二回の遠征が、同じスイスでもジュネーブを中心としたグループによつて組織され、今次はベルン、チューリッヒの連中が中心となつたからで、遠征報告がさきにはフランス語で、今次はドイツ語で刊行されたのも、この辺の事情を反映している。いづれにしてもエヴェレストに向う強力なメンバが立ちどころに揃うのは、さすがアルプスの陸下スイスである。

装備については近年各国遠征隊の経験を充分に生かされたことはいうまでもない。ことに酸素吸入器はフランス製だが、一九五二年以来各国遠征隊の携行したもので最も軽ろく、性能もよかつたようである。詳しく比較表が記載されているから、日本隊のそれと比べてみるのも無駄ではあるまいとおもう。

総荷物の重量は七トン。一九五二年第一回スイス隊遠征の折は、共同登山を提案された英国側で目をみはつたとき、今次のハント隊の七トン半とまづ似たようなものである。装備の中でチョットと珍らしいのはK2のイタリア隊に做つて、ケープル・リフトを加えたこと、これはロツツェ・フェリスの上部二万六千呎に近い高所で活用された。グラウンドシートやアマットレスの外に、湿気と寒気を防ぐためにエアレックス・フロ

ーアマットなるものを七十個持つていつたとあるが、これは一体どんなものなのか？

写真は各自の外に、特に担当者かきめられたが、映画は熟練者がなく、費用が掛り重量がかさみ、エヴェレスト近辺のフィルムは既にあるのでやめることに決定、隊一同ホツとしたというのも面白い。総経費三十六万スイスフラン、英貨にして三万ポンド、邦貨で約三千万円である。大部分は財団の支出、隊員各自も相当の負担をしたが、これはなかなかの重荷だつたらしい。

海路と空路に分かれて遠征隊はインドに向うのであるが、カトマンドウに着いてから、ロツツェ試登の許可を得たので、出発前にはエヴェレストだけの登山許可しか得られなかつたと書いている。ネパール政府は一遠征隊に一つの山しか許さない方針なのを、現地で懇請の結果許可されたという。

ベースキャンプへの途上、隊員のひとり、ルフシシガが穿孔性盲腸炎になり本国へ救援を打電するに至つたが、奇跡的に回復したという事件もあつた。四月八日にはベースキャンプ建設(ハント隊は十二日)、つゞく好天候にめぐまれてロツツェ氷河のふもと約二万三千呎のところC4を進めたのが五月一日(ハント隊は同じ個所にC5を五月三日に設置)。

この頃から天候がやゝ崩れて前進を阻まれたが、十七日にはジュネバ・スパーの上端二万六千呎に近い点にC6が進められ、十八日ライスとルフシシガの二人が、ここからロツツェの登頂に成功した

のである。C6からはやゝ水平に右へ数百ヤード絡んで、あとは高差千七百呎に及ぶクローアールを、まづしぐらに登る。この登りはライスの記述をよんでも、写真をもても並大抵のものではない。クローアールが堅雪で埋つていたのが幸いで、もし着氷だつたら到底登れなかつたらうと登頂者は述懐しているし、アルプスではちよつとこれほどのところははないとも、モンテ・ローザの東側の有名なマリネリ・クローアールよりも急峻だともいつているから、おゝよその想像はつく。残された未踏八千米峰中の最高峰、しかもスイスとしては、始めての八千米級の初登頂に成功した喜びは察するに余りある。

登頂者のひとりルフシシガがさきに危殆にひんした病状から、回復して八五〇一米の山頂を踏んだのは、ロンドン・タイムズもいつているように驚嘆に値している。

ロツツェ登頂に気をよくして、「さあ、こんどはエヴェレストの番だ」とC6をサウス・コルに移し、五月二十二日には南東山稜二七五〇呎の地点(ハント隊C9より約三〇〇呎低)にC7を設置し、シュミット、マルメのふたりがこゝに止つた。C7設置のため荷を担ぎ上げたシェルバ四人がサウス・コルへの下りでスリッパし、七五〇呎も流されたが、羽毛服を破いたとだけ怪我もなかつたのは幸いであつた。もし一人でも重傷を負つたならば、どんな結果になつたか、熟練したシェルバでも高所の、しかも足場の悪るい個所は、隊員の附添なしで行動させ

るべきではなかつたと、隊長が大いに自らを責めているのは味うべきである。

このふたりの登山者の最後の夜に、烈風のために天幕に三つの結びが生じ、吹き込む雪に炊事用具や食料が埋まり、掘出すことは掘出したが、朝食用意に時間をとられるのを恐れ、遂に飲まず食わずで、世界の最高峰へ登ることになるのである。「晴れた朝を迎へてこの幸運を逃がしたくない。朝食を食べる機会がこれから先きいくらでもあるだろう。エヴェレストに登るチャンスは、どんな朝めしにも代へられなかつた」といつているのも面白い。この日は晴れていたが非常な強風が吹いて、八時半にテントを出た二人のどちらかへ引返そうと口に出したならば、文句なしに下りてしまつたらうと、あとで語つたような精神状態だつたらしい。C6にいた隊長も、ラジオが通じれば彼等を呼戻したに違いないと言つているような雲行きだつた。しかし二人は黙々と登りかかり、遂にエヴェレスト第二登に成功したのである。

ふたりがC7まで下つてきた時には第二登攀隊のライストとフォン・グンテンがダ・ノルブを伴つて着いてきた。第二隊が結びたテントで過ごした夜がコンフォタブルでなかつたのは、言うまでもない。天幕を整備する間にビヴァーク・サックを風を持つてい、かれたり、寝袋のジッパーがこわれて閉まらなかつたり、散々な目にあつている。たゞ五月二十四日は殆んど無風快晴の好日であつた。六時

四十五分C7発、十一時エヴェレスト頂上という快調ぶり。彼等はまるでアルプスのある山頂でのやうに二時間も世界の最高点にとまつて、フィルムを取代えたり、腹ごしらえをしたり、見飽かない展望をたのしんだりしたのである。

一九五二年二度の試登にやぶれハント隊に先を越されたスイスの連中の胸の中も、やつとこれでおさまつたにちがいない。

話は変わるが、先頃日本でナンとかいう雑誌(誌名失念)に、一九五三年のエヴェレスト登頂は嘘といふ一文が載つていた由(僕はそんなものを読むほど酔狂ではない)だが、本書の図版二二三とハントの著の図版四十五とを並べてみれば一目瞭然。サー・ジョンは東洋語が達者だそうだが、まさか日本語までは解るまいから、英訳して届けたら、A・Cの茶飲話の材料位にはなるかもしれない。

閑話休題、第二攻撃隊登頂のあとを追つて、下方のキャンプから続々とサウス・コルめざして上つてきた隊員達は、さらにローツェへ、またエヴェレストへ向いそうな気構え、隊長自身もこの機会をのがしてはとの考えが浮んだらしい。それほど人も揃い、酸素装備食料も高所にタツプリ上がつていたのである。隊長は撤収に決断を下したのであつた。

メリカの歌で大きいに交歓したという。荒らくれ男ばかりの生活が何カ月もつゞいたあと、さもありなんとおもわれる。

この本の始めに著者エグラーは、われわれは登山者であつて、文筆の士ではないと書いています。が、タイムズの評者のいうやうに、ハントの本では附録に扱われた酸素装備食料などの事項が本文に現われるのは、一般読者にとつて煩わしいかも知れないが、その点を別にすれば読者をグン／＼ひつぱつてゆく行文は見事だとおもう。(一九五八年二月記 藤島敏男)

三月のニペソツ岳

井手 貢 夫

音更川の上流に温泉が出て、そこに営林署の立派な小屋がある。と聞いて、そこから石狩岳やニペソツ岳へ行つて見たい、と暮のうちに思つていた。たゞ一昨年病氣をして、昨年も暮近くまでどうも疲れ易く、これで果して山へ行けるかどうかと心配していたが、二月にニセコへ行つたら案外元気で、ニセコの頂上にも、イワオヌプリの頂上にも立てたし、スキーも思つたより調子がよいので、これならばニペソツはとにかく、石狩岳なら行けようし、工合

が悪ければ、温泉で休みながら、ぶら／＼スキーの散歩も面白からうと若い人たちを語らつてでかけたわけである。

三月十八日に山へ入り、十九日は快晴であつたが、風が強く、石狩岳へ行つて、国境尾根まで登つた若い人達も、そこから顔を出したでけい、あと三十分ほどで頂上というところから引き上げてきた。翌日は風がおさまると思つたのに、二十日、二十一日と猛烈に吹雪いて、やつと二十二日にニペソツへ行けた。もつとも二十日、二十一日とも六時に出発して三つの沢を調べて、二十一日にはまたたぐまに膝まで埋まる吹雪の中をとくまかくニペソツ岳へ続く天狗(一八七六米)の頂上までは行つたので、二十二日の行動にためらいも迷いもなく、都合よく運べたのである。ただ二十二日にも、午前三時にはまた雪だつたので、一眠りして六時半に起きて出発が八時におくれたことは、病後の私には時間的な余裕を失はせることになつたが、ゆつ／＼と睡眠をとつたかいはあつた。一六〇〇米あたりでデポする頃から風もないで、無風快晴の空のもとに、石狩岳から音更、ユニ石狩岳からクマネシリ山、そしてその背後に遠く阿寒の山々から更に斜里岳までをふりかえりながら、近くは眼下に糖平湖、その右にウベベサンケ岳を見て、左手には大雪から遠く十勝岳までの連峰を眺めての尾根歩きは、まことに天上の浄界に遊ぶ心地であつた。ただ、ニペソツへの最後の登りを私は断念した。なんといつても弱つた体に登りは時間

がかかるので、帰りにくねくねした森の中を明るいうちに滑りたいと思つと、元気な若い人たちが、調子をすこしもくずさずに、せつせと頂上めがけて登つて行くのを見守つているよりほか仕方がなかつた。体が弱つては無理は禁物である。しかしその帰りに案外に元気で、シタイク・アイゼンをスキニーにはきかえてから疲れを覚え、五時半には小屋にもどれたから頂上へ行つても、明るいうちに帰れたかも知れない。病後はずいぶん山にも行けまいと淋しかつたが、まだまだ、山へ登れると安心したしだいである。若い人たちは余勢をかつて、翌日また吹雪になつたが石狩岳の頂上にも行つてきた。なお岩間温泉と称するその小屋は、上土幌営林署の許可を得ないと使えないが、営林署の仕事がすめば小屋として残されるそうだから、便利になることだろう。

山なみを追うて

北信・東信編

佐藤 貢 編

信州の山に於て諸家の随想、記行、動、植物、地理、気象、伝説などに関する文章をたんに集めて一本にまとめたもの、本編では戸隠、妙高、志賀高原、菅平高原、浅間山群、荒船山群、金峰山群、八ヶ岳山群にわけ、あらゆる山の事象をとりあげている。主としてその土地に近い人たちの手になるものだけに郷土色豊かである。(昭和三十三年十月信濃山の会発行、三五五頁、三八〇円)

パミールにおけるソ連の活動

(1928—1956)

吉沢 一郎

最近着いた「Bergsteiger」の十二月号(一九五七年)に表題の記事があつたので何かの参考にもと、こゝに補足を加えて紹介しておくことにする。

勿論ロシア人のパミール探検は何も一九二八年から始まつたわけではなく、「The Pamirs and the Source of the Oxus」 by George Nathaniel Curzon, 1896

等参照のこと)組織的な科学的な探検や登山が行われ始めたのは、第一次大戦(一九一四—一九一九)並びに大革命(一九一七)以後、特にソビエト社会主義共和国連邦成立宣言(一九二二)が行われてからであつて、まず一九二八年のソ連科学アカデミーと独逸山岳会の合同で実施されたパミール遠征が、大規模な組織的かつ科学的探検事業の最初のものといつていゝと思う。

レーニン峰(七一三四米)がK・ヴィーン、E・シュナイダー、E・アルヴァインの三人によつて初登頂されたのはこの時である。なおこの後、ソ連以外の国の人がパミールに入つたのは、これから二七年経つた一九五五年の中共隊で初めてである。

活発な強力なソ連の遠征活動については、その後長い間鉄のカーテンの向側のこととしてわからずにいたが、一九四八年 D.M. Sautowski によつて著わされ、一九五三年になつて Helmut Schöner によつて独訳された「Auf den Gletschern und Gipfeln Mittelasiens」によつて多少その間の事情が明らかとなり、次いで同じ筆者が書いた「In Schnee und Fels. In den Bergen des Pamirs und Zentral Tienschan」の改訂版において一九二八—五六年の活動の概要が、カーテンの外にも発表されることになつた。なお、W. Atalakow の「Die Grundlagen des Alpinismus」1952の最後のところにも、コカサス等を含めたソ連の登山活動(一九二二—四八年)が出てゐる。

大体ソ連の遠征隊の目的というものは、純粹にスポーツ的なものは余りないらしい。処女峰の初登攀とか未知の氷河や峠の初横断などは二義的なもので、登山家グループの第一の任務は、科学班の仕事やスミーズにやらせるための手助けや、通路の構築、補修などにあつた。科学者達はそこで地図の作製、地質の調査、気象観測所の建設、就中、広大な中央アジアの平原に対する水利事業にとつて、これ等の巨大な山岳地帯がどの位置要なものであるかを踏査する、というわけである。

活動表(年次、氏名、場所)

一九二八年

- パミール遠征隊科学アカデミー登山班、O・J・シュミット、N・W・クリレンコ、L・W・ペルリン、他
- ・ヤズグレム谷、フェドチェンコ氷河、サウクダラ谷(ペルリン)
- 一九二九年
- N・W・クリレンコ隊、A・ポリヤコフ、S・ガネツキー、ナグマノフ、他
- ・南側よりのレーニン峰試登二回、クリレンコ峠越え
- 一九三〇年
- A・A・レタウエト教授隊
- ・オビチンゴル谷、ベシイ峠、スルガン氷河、ガンドー氷河
- 一九三一年
- 科学アカデミー、N・W・クリレンコ登山班
- ・ベシイ峠、ガルモ氷河(初登頂九峰、峠越三)
- 一九三二年
- (1)N・W・クリレンコ隊、ガルモ氷河、ワビロフ氷河、科学アカデミー山脈山稜、シヨカルスキー氷河、フェドチェンコ氷河
- (2)N・P・ゴルブーノフ隊、フェドチェンコ氷河、スターリン氷河、スターリン峰東稜五六〇米まで
- 一九三三年
- (1)N・P・ゴルブーノフ及びJ・M・アバラーコフ
- ・フェドチェンコ氷河、スターリン峰初登頂(アバラーコフ)
- (2)N・W・クリレンコ及びA・W・モスクウイン
- ・シニビニ、フォルタンベク、モスクウイン等の氷河、四人峰登頂

- 一九三四年
- (1)O・D・アリストフ隊
- ・トランスアライ山脈、スターリン峰東稜、自動放送局設置
- (2)中央アジア軍管区司令パミール活動隊
- ・アライ谷、レーニン峰の七千米まで二十一人到達、北側よりレーニン峰新登頂、スルマルト山脈、トランスアライの南側支脈
- 一九三五年
- 第二回中央アジア軍管区司令パミール隊、N・N・キチャイエフ、W・アバラーコフ
- ・トラベツ峰(六〇五〇米)、無名峰(ベジムヤンナヤ、五七一〇米)、コクチュクルバシ峰(五七〇〇米)等の登頂
- 一九三六年
- 前記第三回隊
- ・L・L・パールシャシユ隊、レーニン峰六八〇〇米まで、J・A・ビエツキイ、I・G・フイヨドロフによるゼルシンスキイ峰(六七一三米)初登頂、スターリン峰北側登路偵察(五五〇〇米まで、フォルタンベク氷河)、コルシエネフスカヤ峰、六五〇〇米まで
- 一九三七年
- 体育及びスポーツ委員会隊
- ・北側よりのレーニン峰及びスターリン峰登頂、コルシエネフスカヤ峰、六九一〇米まで
- 一九三九年
- W・W・ネムツキイ隊
- ・ズルガン氷河、シニビニ氷河
- 一九四〇年
- A・W・ブレツシユチエノフ隊
- ・アクバイ谷峠附近の登山、フェドチェンコ氷河、科学アカデミ

- ・山脈の峠越え、ブルコフスキー峠他
- 一九四一—四五年
- 各種遠征隊
- ・ゾルチエエクテイ峰、オリヨール峰(鷹)、ゼルシンスキイ峰等の登頂
- 一九四六年
- 体育委員会隊、J・A・ビエツキイ、J・M・アバラーコフ他
- ・マルコウスキイ氷河、パトコール峰登頂(十三人)、シャツハダール谷、マルクス峰登頂(七人)
- 一九四七年
- 体育委員会隊
- (1)A・A・レタウエト、J・A・ビエツキイ隊
- ・ズルガン氷河、モスコウ峰西稜六二〇〇米まで、ソ連三十年峰登頂(レタウエト他)
- (2)D・M・ザツロフスキー、J・A・カザコフ隊
- ・マヤコフスキー峰等九峰初登頂
- (3)W・W・ネムツキイ隊(五人)
- ・ピヤンジ谷、ガラムチャムシヤ谷
- 一九四八年
- (1)W・W・ネムツキイ隊(四人)
- ・ビジャルフ峠、ヤズグレム谷
- (2)体育委員会隊、A・S・ムチン、W・S・ナウメンコ他
- ・ガルモ氷河、ヴァウイロフ氷河、ガルモ峰(六六一五米)、シユチエルバーコフ峰その他登頂
- (3)A・B・プレシユチエノフ、W・S・ヤツエノ
- ・アクバイ谷峠附近の六千米峰、アルクニヤ科学アカデミー峰、ライコフ峰等の登頂、ムスコル山脈の東部にある一連の氷河踏

- (4)W・W・ネミツキイ隊(七人) ガンド氷河、ベシイ峠、ズルガン氷河、四八五〇米峰、ザツコ峰(プロレタリア旅行協会山脈)の登頂
- 一九四九年
 - トルキスタン軍管区遠征隊(隊長W・I・ラツェク)
 - レーニン峰(十二人)、ミール峰の登頂
- 一九五〇年
 - (1)W・W・ネミツキイ(七人) フェドチェンコ氷河、タニマス峠、バルタン谷
 - (2)体育委員会教官団、隊長D・M・ザツコフスキー エンコ峰の登頂
- 一九五一年
 - トルキスタン軍管区隊、W・I・ラツェク隊長
 - トランスアライ山脈、コルシエネフスカヤ峰その他十五峰に登頂
- 一九五二年
 - (1)労働組合中央委員隊、D・M・ザツコフスキー、A・I・イヴァノフ
 - グルムグルシマイロ氷河、シュヴェルニク峰(六一三五米)、ソ連労働組合峰(六四〇八米)、ソ連登山家峰(六三七〇米)、シユネートラペートツ峰等の登頂、革命峰試登、六四〇〇米まで
 - (2)スポーツ連盟スパルターコフ隊、隊長、W・M・アバラコフ
 - レーニン峰(六七〇〇米まで)、第十九党記念日峰、ラスジェルニイ峰(六一四八米)の登頂
 - (3)W・W・ネミツキイ隊(六人)
- 一九五三年
 - (1)体育委員会隊、隊長、D・M・ザツコフスキー、J・A・ビエレットキイ
 - フロートランベク氷河、コルシエネフスカヤ峰(八人)。及び六二〇〇米峰の登頂
 - (2)W・W・ネミツキイ隊(十人) ズルホブ谷、キシルスー谷、トランスアライ山脈
 - (3)トルキスタン軍管区隊、隊長W・I・ラツェク
 - ラスジェルニイ峰を越え、レーニン峰を西から東へ横断する(四人)
- 一九五四年
 - (1)労働組合中央委員隊、隊長、J・A・カサコーヴァ
 - グルムグルシマイロ氷河、革命峰及び六五〇〇米峰の登頂
 - (2)グルジア山岳会隊、隊長、O・I・ギギナイシユヴィリ
 - キシユティジャローブ谷及び氷河、マルクス峰、エンゲルス峰、ニコラーゼ峰その他の登頂
 - (3)W・W・ネミツキイ隊
 - テルサガール峠、カインディ峠
- 一九五五年
 - (1)グルジア山岳会隊、隊長、O・I・ギギナイシユヴィリ
 - ガルモ氷河、スターリン峰、モロトフ峰、ブラウダ峰の登頂
 - (2)労働組合中央委員隊、隊長、J・A・ビエレットキイ、K・K・クスミン
 - カラジルガ谷、バイガシユ谷、十月氷河、統一峰、十月峰の登頂、十月峰よりレーニン峰への横断
 - (3)ブレヴェストニーク・スポー

- ツ連盟隊、隊長、J・A・カサコーヴァ
- オビチンゴウ谷、ピヤンシ谷、アブツカゴール峠、フェドチェンコ氷河上流地域
- (4)W・W・ネミツキイ隊
- ホログ、ヴァンナ谷、グジヴォシ峠、カラ・イ・チュンブ
- (5)中ソ合同隊、隊長、J・A・ビエレットキイ、K・K・クスミン
- ムズターグ・アータ(三十一人) コンズグール・ティエューベ(八人) 登頂
- 一九五六年
 - (1)グルジア山岳会隊、隊長、O・I・ギギナイシユヴィリ
 - ムクス谷、ズグラン氷河、モスクウ峰登頂
 - (2)ウズベク体育委員会隊、隊長、W・ノズドクトリウヒン
 - トランスアライ山脈、キシル・アギン峰、コルシエネフスカヤ峰、十九党記念日峰、レーニン峰等の登頂
 - (3)トルキスタン軍管区隊、隊長、W・ラツェク
 - トランスアライ山脈にてレーニン峰その他に登頂。

パタゴニアの山々
高木正孝

本隊を横浜にわざわざ見送っていただいたそうぞ恐縮しています。ようやく Arenales を登ることが出来て、今までの御好情、御配慮に對しいささかでもお答え出来たかと思つて嬉しく存じます。

のんきなのは御承知の通りで、山岳会の折井氏に折角便りを書きはじめたのですが、先発隊として早くサッチャゴとび立たねばならなかつたので出さず仕舞いでした。お許し下さい。

Arenales 登山は、全く前世紀アルプスで始つた探検登山をまのあたり再現したようなもので、いい山登りが出来たと心暖まる気持ちになっています。何しろ飛行機をおりたところから Colonia 湖畔までは全く始めの見当がつかず、先発した私と二人のチリー隊員は開拓移民の家によつて様子をきき、ようやく次の様子が判る有様で、それに予想外の蚊の大群で、馬の輸送をさまたげられ、惨たんたる苦心のあげく、トランスポーターはち心として進まず、好天は飛び去るよう過ぎてしまふばかりです。それがすむと七キロの湖水の乗越えと輸送、つぎに三キロの砂漠でようやく氷河の末端にたどりついたのは二週間の好天のあとで、シェルパもポーターもなしのボツカで皆つかれ切つていましたが、一日の休養の後息をもつかず登山を開始しました。

氷河上の登路発見と、ボツカとキャンプを進め、第三キャンプの上でアイスフォールをさげ得たと思つたのもつかの間、巨大なセラック地帯に前進をはばまれ、二日をついやして突破、次にスキー、そして最後はラッシュ・アタックとなつたわけですね。幸いにして航空写真を軍から手に入れ、地図は二十五万分の一しかなかつたのですが、距離の大きなのに比し高度は少く、頂上附近には大なる技術的困難はないとの見通しが當つて登頂出来ました。

小生は結局ははじめから終りまで最先端にあつてルート・ファインディングから、隊の全体組織、チリー側をひきいる仕事までしてまいりやうやく開放されはつとしました。が、疲れがどつと出た感じがす。アレナレスは完全な氷の山で、ルートも小生のカンがすべて幸にして當つたよう有様です。ベース・キャンプが僅か二四〇〇米、比高三二〇〇米、距離BC頂上まで二十五キロと大変なスケールの大きいどつしりした立派な独立峰です。

太平洋までの横断は頂からみたところではとんでもない話で、残りの四十キロの三分の一しかスキーは使えず、あと大氷河で見通しとクレバスの多い大氷河で発見しさえ全くたない無人境でした。全く資料がないのでとんだ嘘を廣言したものです。

チリー側は経験も浅く、一九三〇年代から急速に登山とスキーがはやり出し、サンチャゴ附近のアンデス主脈の二週間前後の山行による初登頂をいまま盛んにやつているような時代で、氷と岩について二、三のわれわれよりすぐれた隊員を出してくれましたが、ポラー・システムなどは全く経験なく、レヴェルは歴史の浅さのため一般に低く、事実上は私が結局すべての指揮を引うけねばならぬ有様でした。しかし両者の力で始めて登れたのであり合同は成功でした。何しろ依田さんが満足されているようですから、写真をみて

よいのではないか、この点、体協とよく話し合ってもらいたい。また慶大のアンナプルナの外貨についても明年度は考慮してほしい。

(楨)

会員総会

昭和三十三年通常会員総会は四月十九日午後二時からお茶の水体協二階会議室で開催、別宮会長渡欧中のため日高副会長が議長となり、三十二年度事業報告があり

次いで太田理事より三十二年度決算報告、予算案附議、定款変更の件を説明、それぞれ可決、本年度理事として別宮貞俊、日高信六郎、松方三郎、浜野正男、折井健一、山崎安治、太田敬、辰沼広吉、村木庸益、松丸秀夫、大塚博美、徳久球朗、石坂昭二郎、越智英夫、野田三郎、田島汎、羽島肇、松沢幸雄、松田雄一、田村扇一の二十名を決定。監事に野口末延、諸岡一次両氏を推薦した。

高頭仁兵衛氏死去

本会名誉会員高頭仁兵衛氏は昭和三十三年四月六日午後六時五分老衰のため新潟県長岡市深沢町の自宅「山岳荘」で死去された。八十一才。葬儀は八日午後一時から自宅で行われた。氏は本会創立発起人の一人、会員番号四、長く「山岳」発行人となり、会のため尽力された。昭和八年十二月から

昭和十年十一月まで第二代会長をつとめられ、昭和十年十二月小島、武田、高野、山川、辻本氏らと共に名誉会員に推された。氏の近況については会報一七八号を参照されたい。

第一八〇回小集会

第一八〇回小集会は二月七日体協会議室で雪崩に関するシンポジウムがあつた。パネルメンパーは安芸皎一、篠田軍治、木下是雄、村木潤次郎、司会松丸秀夫。

第一八一回小集会

第一八一回小集会は二月十八日体協会議室で第二回雪崩に関するシンポジウムがあつた。パネルメンパーは渡辺公平、谷口現吉、金坂一郎、大塚博美の諸氏、司会松丸秀夫理事。

深田隊歓送会

シユガール・ヒマラヤ探査に出かける会員深田久弥、古原和美両氏及び隊員風見武秀、山川勇一郎氏の歓送会が二月二十一日体協食堂で開かれ、盛大に一行の壮途を祝した。

別宮会長渡欧

本会々長別宮貞俊博士は科学情報センターより依頼をうけ海外事情視察のため三月二十四日空路ヨーロッパに出発した。米国をまわり五月二十二日帰国した。

ものの責任として御詫びを申し述べます。

寛恕なる会員諸君に御ゆるしを願うと同時に、本誌は、決して、われわれ当務者のみの舞台でないことを申しあげ、幾重にも本誌のため御助力と御利用あらんことを願う次第であります。(山岳第十一年一号会報欄より)

(山崎安治)

昭和三十三年五月廿五日発行

東京都千代田区

神田駿河台四ノ六

発行所 社団法人 日本山岳会

編集者 山崎 安治

頒価二十円 電話神田(25)八九五二番

振替口座東京四八二九番
東京都港区赤坂溜池五番地
印刷所 株式会社 技報堂



NYLON TENT

SKI & MOUNTAIN GOODS

SUDACHO. KANDA. TEL (25) 6428